断章 旭川のアイヌ語地名研究 ㉓

高橋 基

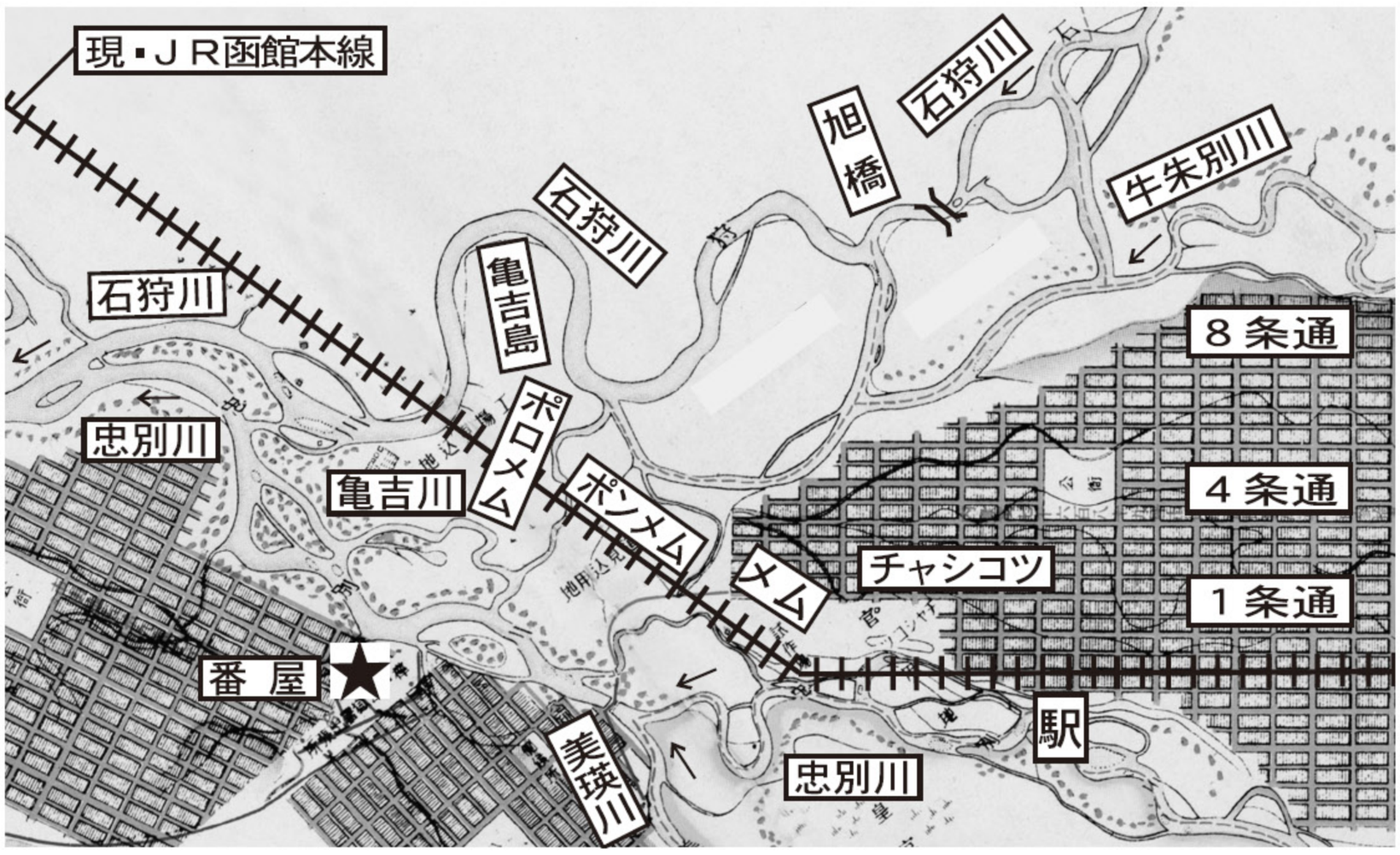
―亀吉川＝ポロメム（下）―

今号の掲載図は、原図が明治二十二、三年頃と言われる『上川市街地区画図』（『旭川市史第一巻』掲載図）である。現在の市内中心部に流れていた川が描かれた唯一の地図である。これに、現在地が分かる手助けとして、ＪＲ函館本線と川名等を記入し、不用文字などを削除してある。

右の原図が作られた頃、明治二十三年に旭川を調査した永田方正は、『北海道蝦夷語地名解』の中で、前回確認した松浦武四郎の記録した**ポロメム＝亀吉川**と、ポンメムを石狩川の**左岸**とした上で、次のように書いた。

＊ポロメム（poro-mem 大池―「メム」ハ石狩川ノ旧流滙シテ池トナリタルモノナリ）

＊ポンメム（pon-mem 小池―同上）



「滙」は、「水がめぐり集まる意味」である。永田方正は、メム（mem）を通例通り、「池」と訳したが、ポロメムとポンメムを「石狩川ノ旧流」と明記したのは、さすがの感がある。

また、永田方正は、石狩川と忠別川の合流点から牛朱別川までの石狩川**左岸**の川名を次の順で記載している。「①チュプペッ（忠別川）、②ピイエ（美瑛川）、③メム、④チポッメム、⑤ポロメム（亀吉川）、⑥ポンメム、⑦ウシシュペッ（牛朱別川）」

永田は、③メムについては、「**メム**（mem 池―『チャシコッ』ノ上ニアリ）」と書いた。**チャシコッ**は、掲載図の現在地・宮下通四丁目～六丁目にあったもの。明治三十一年の鉄道敷設で崩されてしまった。掲載図の現・二条西二丁目から四条西六丁目あたりにあった**古川**が**ポンメム**、そこに流れていたのが**メム**と言われた川と推察される。明治三十一年開業の旭川駅の遠景写真にもこの川の川崖の様子が見られる。

さて、前号で紹介したように、安政四年（一八五七年）の松浦武四郎の「再石狩日誌」で、**ホロメン（ポロメム）**は、掲載図の**亀吉川**であることを確認した。武四郎はホロメンに続き次のように記録している。

「また少し上り、**ホンメン（＝ポンメム）**―**右**の方小川、浅し。底小石川なり。その間に人家多し。（略）アイヌ小屋八軒有。（以下三家記載）。扨此処より少し平地を山の中に分行に、小川あり。此川を**メム**と云よし。鮭魚至りて多きよし。依てむかしより此処に多く家居するもの有とかや（以下四家記載。以下省略）。」

武四郎の記述は、ポロメンに続き、掲載図上でも合致する。ただし、ホンメン以下は、次回に紹介する松浦武四郎の絵図類で、メムが石狩川左岸にあること、また、山田秀三氏が荒井源次郎氏を訪ねた時の記録で、「旭川の**メム（旭川駅付近）**の人たちが、雨竜や天塩の方に熊を、北見の方に鹿をとりに出掛けていった。」（「地名調査同行記」―萩中美枝）という一文からの仮説・試案である。次号では松浦武四郎の絵図を中心に、右の**メム**が石狩川**左岸**にあったことを確認したい。

（アイヌ語地名研究会幹事）

※毎月第1週号に掲載します